

患者とのコミュニケーション場面を想定した シミュレーション演習の実践

Conducting Simulation Exercises to Practice Communication Situations with Patients

藤野 ユリ子¹⁾ 吉川 由香里¹⁾
Yuriko Fujino Yukari Yoshikawa

要 旨

〔目的〕 コミュニケーション場面を想定したシミュレーション演習の実践から看護学生のコミュニケーション向上のためのシミュレーション教育の有効性を検討する。

〔方法〕 看護大学2年生111名を対象に必修科目「コミュニケーションリテラシー」において患者の病室へ初めて訪室する場面を想定したシミュレーション演習を実施した。シミュレーション演習の評価は、授業最終日に、①学生の満足度と自信度、②コミュニケーション能力向上に役立った演習内容、③自由記述に関するWebアンケートを実施した。

〔結果〕 ①満足度と自信度では「この演習での指導方法は効果的で役にたった」「この演習で学ぶべきことを学ぶのは学生としての私の責任だ」といった指導方法や取り組み姿勢が前向きな項目が高かった。また、自由記述では【緊張感のある場面からの学び】【グループ学習による客観的な気づき】など臨床場面をリアルに再現した中で緊張感を持ちグループで学び合うことが役に立ったという結果だった。

〔考察〕 緊張感のある中でコミュニケーション場面を体験し、模擬患者やメンバーからフィードバックを受けるシミュレーション演習はコミュニケーション能力の向上に有効な教育技法であると考えられる。

キーワード：シミュレーション教育、コミュニケーション、看護学生

Keyword：Simulation in nursing education, communication, nursing student

¹⁾ 福岡女学院看護大学

I. はじめに

看護職は対人関係を基盤とする職業であるためコミュニケーション能力を身につけることは重要である。文部科学省（2017）の看護学教育モデルコアカリキュラムでは、看護系人材として求められる基本的な9つの資質・能力の1つとして、コミュニケーション能力が挙げられている。そのため、看護基礎教育では、模擬患者の活用（出原2006、奥山2008、斎藤2019）により、リアルに学ぶことでコミュニケーションスキルを高める取り組みの報告がある。また、樋勝ら（2018）の報告では、臨地実習場面を想定したシミュレーション演習を体験した学生は、実習の準備につながり

観察力が高められていた。しかし、これまでのコミュニケーション演習の取り組みではタスク型で実践したシミュレーション演習の報告は少ない。

本学では看護職へ必要なコミュニケーション能力を身につけることを目的に2年生前期にコミュニケーションリテラシーを開講している。本科目ではコミュニケーションの基本的な技術と医療職としての専門的コミュニケーションについて学びを深めるとともに、患者とのコミュニケーション場面を想定したシミュレーション演習を行っている。

この演習では、基礎看護学実習を控えた時期に初めて患者と出会う場面を想定し模擬患者との対応を全員が経験する。その後、患者とのコミュニケーション場面を動画やプロセスレコードで振り

返り、メンバーとのディスカッションを通してコミュニケーション能力の習得を目指している。病室を想定した演習は緊張感を有する経験となり、この経験を通して看護師に求められるコミュニケーションについて考える機会になっている。

そのため、本稿ではコミュニケーション場面のシミュレーション演習の実践を振り返り、シミュレーション教育の有効性を検討する。

II. 目的

コミュニケーション場面を想定したシミュレーション演習の実践をまとめ、看護学生のコミュニケーション向上のためのシミュレーション教育の有効性を検討することを目的とした。

III. シミュレーション演習の実際

1. 科目概要

本取り組みは2018年度2年生前期に開講する「コミュニケーションリテラシー」で実施したシミュレーション演習である。科目概要とシミュレーション演習の進め方は表1～4、図1に示す。8コマの6・7回目をシミュレーション演習とし、全員が看護師役を実施した。また、第8回目授業は、シミュ

レーション演習のまとめとして基礎看護学実習終了後に実習と演習による自分自身のコミュニケーションの傾向を振り返る内容で開講した。

2. 演習の評価

1) シミュレーション演習の評価の入力時期

シミュレーション演習の評価は、第8回目の授業最終後(2018年7月)にWebで入力を依頼した。

2) 調査内容

- ①学生の満足度と自信度：Jeffries (2006)/National League for Nursing (NLN)で開発された「Student Satisfaction and Self-Confidence in Learning」の日本語版を開発した伊藤ら(2015)に許諾を取り使用した。この尺度はシミュレーション教育の「満足度と自信度」に関する13項目を5件法で得点が高いほど満足度や自信度が高く評価される尺度である。
- ②科目担当者が作成した「コミュニケーション能力向上に役立つ演習内容」6項目5件法であり得点が高いほど肯定的に評価される尺度である。
- ③コミュニケーションリテラシー演習(シミュレーション)の感想や役に立ったこと(自由記述) コミュニケーションリテラシーのシミュレーション演習で学んだことに関する自由記述。

表1 「コミュニケーションリテラシー」科目概要とシミュレーション演習方法

<p>【科目名】 コミュニケーションリテラシー 1単位 30時間 (8コマ)</p> <p>【科目の目的】 ヒューマンケアリングを実践できる看護師の能力要件の1つであるコミュニケーション能力を獲得するために、対人関係の成立に必要なコミュニケーションの基本的技法を習得する。</p> <p>【演習の目的】 看護場面により近い環境で、学習したコミュニケーションの基本的技法を用いて模擬患者と相互交流を図り、自己の対人相互関係能力を振り返る。</p> <p>【対象学生】 111名 (5～6人グループ×24G)</p> <p>【模擬患者】 3名(教育助手) 演習目的と患者の特徴を伝え、学生の傾向とフィードバック内容を事前に伝えた。</p> <p>【演習方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①1人1回は模擬患者とのコミュニケーション場面を経験する(4分間)。 「糖尿病患者」および「肺炎の高齢者」のいずれかの事例 ②観察者は、観察項目に沿って看護師役と患者とのやり取りを観察者用記録用紙に記録する。 ③撮影者は、訪室時からスマートフォンで撮影する。 ④タイムキーパーは、訪室時から4分間タイマーで測定し終了時刻を伝える。 ⑤看護師役は、シミュレーション終了後、メンバー及び模擬患者よりフィードバックを受ける。また、撮影した動画を視聴し対応場面をプロセスレコードに起こし振り返る。
--

表 2 「コミュニケーションリテラシー」科目内容

回	内容
1	なぜ看護師はコミュニケーションを求められるのか
2	関係構築のためのコミュニケーションの基本
3	効果的な質問と伝達
4	「傾聴」「共感」の技術
5	患者とのコミュニケーションのプロセス
6	模擬患者シミュレーション演習①
7	模擬患者シミュレーション演習②
8	シミュレーション演習のまとめ (基礎看護学実習終了後)

表 4 タイムスケジュール

分	ルーム 1	ルーム 2	ルーム 3
10	オリエンテーション		
5	1G	2G	3G
5	4G	5G	6G
5	7G	8G	9G
5	10G	11G	12G
15	デブリーフィング(振り返り)		
5	1G	2G	3G
5	4G	5G	6G
5	7G	8G	9G
5	10G	11G	12G
15	デブリーフィング(振り返り)		
5	1G	2G	3G
5	4G	5G	6G

表 3 場面設定

午前 10 時、個室に入院。病衣に着替え、ベッドに休んだところである。
 教員と実習指導者と学生の 3 人による「実習担当依頼と同意」についての説明は終了しており、看護学生が初めて 1 人で入室してきたところである。

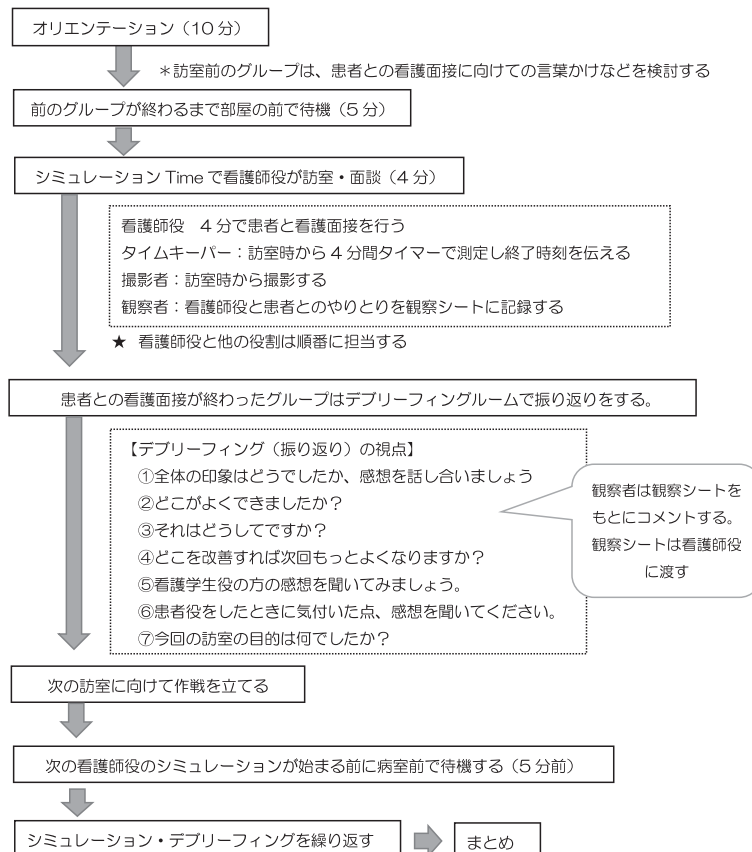


図 1 シミュレーション演習の流れ

2) 調査期間（研究に関する同意依頼）

2019年2月～2019年3月

学生への研究同意は、研究倫理審査での承認を受け、成績評価が終了した時期に実施した。

3) 分析方法

調査で収集した量的データは記述統計により傾向を分析した。自由記述は、内容の類似性に沿って帰納的に分析した。

4) 倫理的配慮

研究対象者に研究の意義・目的・方法、個人データの取り扱いについて説明し、研究参加は任意であり、参加しない場合も不利益を受けず成績評価に影響がないことを説明した。同意は不利益を受けず撤回できるが分析開始後はデータ抽出ができないことについて説明書の配布及び口頭で説明を行い、同意書の提出をもって同意とみなした。なお、本研究は所属機関の研究倫理委員会の承認を得た（承認番号：18-8）。

IV. 結果

対象者111名中、同意を得た97名を分析対象とした。

1. 学生の満足度と自信度

表5に学習の満足度と自信度の平均値を示す。満足度で高い項目は「この演習での指導方法は効果的で役に立った（ $4.56 \pm .52$ ）」が最も高く、「この演習で使用した教材は、学ぶ気にさせ、学習の役に立った（ $4.48 \pm .56$ ）」「私の担当教員が演習を進めるやり方は楽しかった（ $4.47 \pm .61$ ）」の順に高かった。

学生の自信度の項目は、「この演習で学ぶべきことを学ぶのは学生としての私の責任だ（ $4.54 \pm .50$ ）」「この演習は、基礎的な援助技術を修得するために欠かせない、重要な内容を取り扱っていたと確信している（ $4.49 \pm .52$ ）」の項目の得点が高かった。

2. 実習やコミュニケーション能力の向上に役立った演習内容

表6に実習やコミュニケーション能力の向上に役立った演習内容の得点を示す。「患者役からフィードバックを受けたこと（ $4.64 \pm .50$ ）」が最も高く、「メンバーの患者面談場面を観察したこと（ $4.62 \pm .57$ ）」「患者と面談を体験したこと（ $4.61 \pm .62$ ）」の順に高かった。

3. シミュレーションの感想や役に立ったことに関する自由記述の内容

表7は自由記述の内容分析結果である。授業終了後に実施した「コミュニケーションリテラシー演習（シミュレーション）の感想や役に立ったこと」の問いに対する回答から77コード、11サブカテゴリ、5カテゴリが抽出された。なお、【】はカテゴリ、[]はサブカテゴリを示す。

【緊張感のある場面からの学び】は、[緊張感のある演習][模擬患者を活用した演習]から生成され、リアルな緊張感ある状況を体験することで実習での緊張が和らいだ学びを示していた。

【グループ学習による客観的な気づき】は、[グループ討議による視点の広がり][グループメンバーからの気づき]から生成され、意見交換によって自らを客観視したことを示していた。

【患者とのコミュニケーションへの応用】は[患者とのコミュニケーション場面のイメージ化][患者との接し方や会話の進め方の理解]から生成され、患者との会話をイメージできたことを示していた。

【実習でのコミュニケーション場面に活かされる】は、[演習事例が実習で活かされる][実習の心構えと自信の獲得][実習でのコミュニケーション技法の活用]から生成され、実習の心構えができ活かされたことを示していた。

【自己のコミュニケーションの気づき】は、[自己のコミュニケーションの理解][動画による自己のコミュニケーションの振り返り]から生成され、自己のコミュニケーションの理解を示していた。

表 5 学生の満足度と自信度

(n=97)

		平均値	標準偏差
満足度 (Satisfaction with current learning)			
1	この演習での指導方法は効果的で、役に立った	4.56	0.52
2	この演習で得た各種の学習教材や活動で、基本的な看護援助における学習がしやすくなった	4.46	0.52
3	私の担当教員が演習を進めるやり方は、楽しかった	4.47	0.61
4	この演習で使用した教材は、学ぶ気にさせ、学習の役に立った	4.48	0.56
5	担当教員が演習で指導した方法は、私の学習方法に適していた	4.36	0.60
自信 (Self-confidence in learning)			
6	担当教員が私に示した演習活動の内容を、十分に習得しているという自信がある	4.00	0.68
7	この演習は、基礎的な援助技術を習得するために欠かせない、重要な内容を取り扱っていたと確信している	4.49	0.52
8	この演習から、臨床の現場で必要な仕事を行う上で求められる知識やスキルを、確実に得られていると思う	4.34	0.63
9	担当教員はこの演習の指導で、役に立つ教材を活用していた	4.47	0.52
10	この演習で学ぶべきことを学ぶのは、学生としての私の責任だ	4.54	0.50
11	この演習で取り上げられた考えが理解できない場合、どこに支援を求めればよいのかを知っている	3.97	0.73
12	こうした技術の重要な側面を学ぶ上で、演習をどう利用すればよいのか理解している	4.18	0.52
13	この演習の内容から何を学ぶべきなのかを理解している	4.28	0.45

表 6 コミュニケーション能力の向上に役立った演習内容

(n=97)

	平均値	標準偏差
患者と面談を体験したこと	4.61	0.62
メンバーの患者面談場면을観察したこと	4.62	0.57
スマートフォンで撮影して動画を観たこと	4.35	0.85
患者役からフィードバックを受けたこと	4.64	0.50
観察者からフィードバックを受けたこと	4.57	0.58
プロセスコードで振り返りをしたこと	4.48	0.65

表 7 コミュニケーションリテラシー演習（シミュレーション）の感想や役に立ったこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
緊張感のある場面からの学び	緊張感のある演習	シミュレーションで実習に行く前に、緊張を味わうことができてよかった。
		演習したことで声掛けや留意点を把握していたので、実際に患者と話をするときあまり緊張せずに話すことができた。
	シミュレーションをすることによって実習で緊張し過ぎることなくコミュニケーションをとることができた。	
	演習で患者との雰囲気や緊張感などに触れられたこと	
模擬患者を活用した演習	本当の患者さんと接しているかのような緊張感をもった練習をすることができた	
	演習で友人ではなく、教員を相手にすることで率直な意見を聞くことができた	
グループ学習による客観的な気づき	グループ討議による視点の広がり	予想していなかった返答などがありそれをどう乗り越えるのかグループのメンバーで考えたりするのはとてもいい学びになった
		グループでの討論はいい時間だった
		他の学生の受け答えの仕方を見ることができとてもためになった
		友達の良いところを見ることができた
	グループメンバーの意見による気づき	人から指摘してもらうことで自分の出来ていない点に気づくことが出来た
		メンバーからの振り返りを受けて深く学ぶことができた
第三者からの視点から学べるが多かった		
他のメンバーからの意見を客観的に聞いたこと		
患者とのコミュニケーションへの応用	患者とのコミュニケーション場面のイメージ化	演習をしたことによって、実習でスムーズに行うことができた
		シミュレーションをすることでイメージをすることができた
		実際にシミュレーションを行うことで場面を想像しやすかった
	患者との接し方や会話の進め方の理解	どういう会話の流れをしたら良いかわかった
		患者の身の回りの観察から話題を見つけることを学んだ
		患者さんとのコミュニケーションの取り方、会話の進め方、何を情報収集すべきかという考え方
どういうことに気をつけながら会話をするべきなのか		
患者さんとの接し方		
コミュニケーションを取る際に気をつけることや、技術を学んだこと		
実習でのコミュニケーション場面で活かされる	演習事例が実習で活かせる	事例をもっと増やして演習すれば実習で自信を持ってコミュニケーションをとることができる
		無口な患者設定による演習が実習で活かされた
		難聴患者の事例が役立った
	実習の心構えと自信の獲得	コミュニケーションがとりづらい患者設定の経験が役立った
		事前に患者さんとの模擬練習をしたことで、実習に対しての心構えができた
		「シミュレーションをしたから大丈夫」という自信につながった
実習でのコミュニケーション技法の活用	患者さんとのコミュニケーションで気をつけることや、技術を学ぶことができ、実際の現場でもそれを生かすことができた	
	演習したことが実際の実習のときの場面と重なる点多かったのできちんと対応できた	
	シミュレーションの反省点を実習で生かすことができた	
自己のコミュニケーションの気づき	自己のコミュニケーションの傾向の理解	患者との接し方についての注意点や改善点などを把握することができ、実際の患者さんと接したときもコミュニケーションを取りやすかった
		本物の患者と接するようにコミュニケーションが取れたので、実習の中でも相槌や表情など学んだことを思い出しながら患者さんと接することができた
		自分はコミュニケーションが思いのほかとれないことを実感した
	動画による自己のコミュニケーションの振り返り	自分に何が足りないところを気づくことができた
		患者との接し方の難しさを知った
		知らない人を相手にした時に自分がどうなるのかが分かった
患者の答えに対して自分はどのように返したのかも動画を撮ることによって振り返ることができた		
動画を見ることで自分の言動や姿勢を確認することができた		
実際に自分の演習している姿を動画を見て、客観的に見て学べるが多かった		

V. 考察

1. 臨床現場を再現した緊張感のある演習

学生は[緊張感のある演習]を体験することで実習での落ち着いた対応につながっていた。つまり、事前に現場をイメージするリアルな体験することで実習への心構えができていたと考える。斎藤ら(2019)は、模擬患者(SP)演習による学生同士にない緊張感を体験し、振り返ることで不安の軽減や解消につながったことを述べている。このように、今回のシミュレーション演習で現場を再現した緊張感のある演習を体験し、振り返った経験により、学生は実習の不安が軽減し、患者との落ち着いたコミュニケーションにつながったと思われる。

また、「この演習で学ぶことは学習者としての責任である」項目が高得点であり、「この指導方法は効果的で役に立った」といった項目の得点も高かった。このように学生はシミュレーション教育に対して目的意識をもって参加し、その効果を実感していると思われる。病室をリアルに再現した演習は緊張感を有する経験をするとともに、看護師に求められるコミュニケーションについて考える機会になると考えられる。

2. フィードバックによる自己課題の気づき

コミュニケーション能力の向上に役立った演習内容では、「模擬患者からのフィードバック」や「メンバーの患者対応を観察したこと」が高かった。シミュレーション教育はお互いの実践を観察しディスカッションすることが有効な学びとなる。そのため、今回メンバー全員でお互いの対応を観察する機会を作り、どのように対応すればよいか振り返る演習設計であったことは、学生のコミュニケーション能力向上に有効であったと思われる。

また、模擬患者らのフィードバックの得点も高かった。今回の模擬患者は、教育助手であり今回対象の学生とは面識が少ない教員であった。そのため、よりリアルな臨床場面の再現となったため模擬患者からのフィードバックが効果的に伝わったことが考えられた。原島ら(2012)の模擬患者

演習の効果にも「模擬患者のフィードバックからの学び」が報告されており、模擬患者からのフィードバックを効果的に活かす演習を設計することが重要であると考えられる。

3. 今後の課題

今回のシミュレーション演習における患者とのコミュニケーション場面を想定した緊張感のあるリアルな環境での経験は、実習での落ち着いた対応につながっていた。

また、今回は評価ではなく体験から自分の傾向を知ることでコミュニケーション能力を向上させることをねらいとしていた。そのため、初めての实習前に臨床をイメージして患者との会話を体験することは有効であったと考える。

今後は、実習後のコミュニケーション能力を評価するOSCEを実施することで、自分の課題を客観的に捉える機会となりコミュニケーション能力の向上につながると考える。

VI. 結論

本取り組みの目的は、看護大学2年生を対象に患者とのコミュニケーション場面を想定したシミュレーション演習の実践を振り返り、その有効性を検討することであった。全員が看護師役として患者と初めて出会う場面を体験することで緊張感のある場面から、臨床をイメージすることができ、模擬患者やメンバーからのフィードバックの有効性が示された。シミュレーション演習の方法は効果的で役立ったという評価が得られた。今後は、OSCEによる客観的な評価を実施することでコミュニケーション能力の向上につながる教育プログラムの開発が課題である。

VII. 謝辞

本取り組みにご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。なお、本取り組みはJSPS 科研費基盤研究 C17K12518 の助成を受け、実施した。本研究における利益相反は存在しない。

引用 / 参考文献

- 伊藤朗子, 富澤理恵, 山本直美, 他.(2015). シミュレーション教育を用いた基礎看護技術演習の評価. 千里金蘭大学紀要, 12, 51-59.
- 文部科学省.(2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 2020-08-31.
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf
- 出原弥和, 辻川真弓, 本田育美, 他.(2006). Simulated patient を導入したコミュニケーション演習の評価, 三重看護学誌, 8, 93-100.
- 原島理恵, 渡辺美奈子, 石鍋圭子.(2012). 看護における模擬患者を活用したシミュレーションに関する文献検討. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 4(1), 47-56.
- 樋勝彩子, 佐居由美, 加藤木真史, 他.(2018). 臨地実習場を想定したシミュレーション学修 - 初回訪室時の環境整備と観察 -, 聖路加国際大学紀要, 5, 95-99.
- Jeffries, P.R. & Rizzolo, M.A. (2006). Designing Use of Simulation to Teach Nursing Care of III adults and Children: National, Multi-Site, Multi-Method Study.
- 奥山真由美, 肥後すみ子, 萩あや子, 他.(2007). SP 導入によるコミュニケーション演習の授業改善がもたらす学習効果. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 14(1), 81-89.
- 斎藤利恵子, 山本瑞恵, 石井千春, 他.(2019). 基礎看護学実習前の模擬患者 (Simulated Patient) 演習に関する研究 (第2報) - 模擬患者とのコミュニケーションを通じた体験 -, 足利大学看護学研究紀要, 7(1), 35-43.